

言葉を科学する：人間の再発見

Day 6 ちよつとだけ feedback

・Q：なぜ、世界の言語は書いたとおりに読ませてくれないのかとても疑問です。日本語でも「わ」「は」のようにずれがあります。

***よい質問ですね。日本のように幼い頃から文字言語に触れて育つ環境では、読み書きをするのは当然と考えてしまいがちですが、人類の歴史から見ると、人間が体系的に文字を使うようになったのは、人間言語が発生してからずっと後になってからのことです。そして、世界には文字を持たない言語もたくさんあります。さて、文字を持つ言語全てに当てはまることだと思われそうですが、書記体系は大変保守的です。音声言語は時間とともに少しずつ変化しています。奈良時代の日本語の発音と今の日本語の発音とはかなり異なると考えられています。1000年後の日本語の発音も現在のものとはずいぶん違うでしょう。すると、音声言語のほうは少しずつ変化しているのに、文字はあまり変化しないという事態が発生します。その結果、文字と実際の発音の「ズレ」のようなものが生じます。現代日本語では「じ」と「ぢ」は発音上区別されませんが、歴史的には異なる発音であったと考えられます。あるいは英語の know や knight になぜ発音されない文字「k」が最初についているかといえば、これらの単語の語源をさかのぼると、最初に[k]のような音を持っていた単語にたどり着きます。その名残が、さまざまな理由から残っていると考えられるようです。**

・Q：[p]と[b]の違いは、声帯の振動の有無ということだったが、小声でひそひそと話しているときは、声帯を震わせていない時が多いとおもう。その場合はどのように区別できるのだろうか？

・小さい声で、ヒソヒソと声帯を震わせないで話しているような時は、どうやって「pe」と「be」とを区別して認識しているのだろうか。

***すばらしいポイントに気がつきました。ひそひそ話をする時のように、声帯を振動させずに話すことがあります。普通に話しているときに比べれば、聞いている方にすれば有声無声の区別は難しいことも多いでしょうが、それでも p と b の区別ができることも少なくないようです。考えられる理由は、(i) 声帯の振動以外にも微妙な音声上の違いがある、(ii) 単語の意味など文脈などなどから推測している、などが考えられそうですね。**

・Q：何をノイズとみなすかは、個々の立ち位置（仮説）によって異なるということであったが、それぞれの仮説から得た結論が正しいか否かを判断するための基準のようなものは存在するのだろうか？

・言語について論じるには、必ずとっていいほど、誰かが決めた理論が枠組みがあるということを感じた。個人の考えでは、何が正しい、誤りとは言えない状況にあると思う。

***すばらしいポイントです。これは人の言語能力の研究にかぎらず、すべての自然科学科学を考える上での根本的な問題です。この授業を通して、そして大学生生活全般を通して、じっくりと考えてみてください。何かたった一つの判断基準で成否を決めることは出来ないと考えられます。どのような現象もそれを科学的に客観的に研究するためには、その研究の理論的枠組みを具体的に決める必要があります。そうしなければ、どのような立ち位**

置からその現象を見ているのかが不明確（無自覚）になってしまい、何らかの結果が出たとしても、その結果が何を表しているのかが分からなくなってしまいます。では、どのような理論的な枠組みがよいのか？それは先験的にはわかりません。それゆえに、みなで知恵を出し合って研究に取り組んでいるわけです。

・Q：国際標音記号は、何かひとつの言語を基準に決めているのか。普通のアルファベットにない記号もあるのは、何かの言語からとっているのか、それとも発音記号を作成する際に作ったのか。

*よい質問です。これは、複数の言語の言語音を記述する仕事を始めた言語学者たちが、客観的に（特定言語の書記体系に依存せずに）さまざまな言語音に対応できるように、時間をかけて築き上げてきたものです。最初に体系化されたのは、1888年でそれ以降少しずつ改訂されているようです。興味のある人は、下記を参考に。『国際音声記号ガイドブック—国際音声学案内』国際音声学（編集）、竹林滋、神山孝夫（翻訳）、大修館書店、2003年（原著1999年）

・Q：いわゆる滑舌の悪い人は、音素の識別能力が低いということでしょうか？

*これは慎重に考えなければならない問題ですね。まず、何らかの病理的な理由で発声器官が健常ではない場合は、ここでは除いて考えましょう。そこで、いわゆる「滑舌の悪い」人が、母語の「聞き取り能力」が健常よりも明らかに劣っているということがあるか、という問いになりますね。（ここでも病理的な理由で聴覚器官が健常ではない場合は除いて考えます）。「音素の識別能力が低い」ということは、あまり考えられないと思います。いわゆる、口下手や人前ではきはきと話すのが苦手な人でも、母語であれば、人の話は普通に理解できますね。その意味で、言語能力（competence）に差があるとは考えにくいと思います。実際の言語運用（performance）は、さまざまな原因に影響されます。したがって、日常的な意味での「滑舌の悪さ」は、球技が得意・苦手、とか走るのが速い・遅い、などといった通常の個性の違いの1つと考えてよいでしょう。Competenceの意味での「能力が低い」ということにはならないと思います。

・Q：ペアワークの中で考えたのだが、規則があって単語の構造を覚えたわけではなく、自然に暮らすうちに身に付いたものが、実は規則に従っている、と考える方が違和感が無いように思った。

*そのような理解がよいと思います。興味深い問題は、そのような規則がなぜ自然に暮らすうちに身につくのかということです。つまり、身についた人の頭の中の言葉を操る能力の中に、そのような規則が発達したことになるので、なぜ、そのようなことが起こるのか、という問いですね。これは、この授業を通してずっと考えていく問題です。